

Y. Yさん

1988年生まれ。子ども1人(1歳)、母、弟と同居。豊中市在住。
勤務先：化粧品販売業(従業員数1,900人)、大阪市内の店舗勤務(従業員数16人)
雇用形態：契約社員(美容部員)
育児休業：満1歳まで取得(最長1年半取得可能)



■ビューティーアドバイザーとして経験を積む

美容専門学校に1年間通い、そこでフェイシャルエステやネイル検定、色彩検定といった基本的な資格を取得した。卒業後、ビューティーアドバイザー(BA)として就職。化粧品の販売、接客に携わる。

しかし、1年で勤務先が閉じることになり、やむなく転職しなければならなくなった。BAとしての1年の経験が活きて、すぐに転職先が決まった。その転職先は学生時代に第一志望だった会社で、契約社員ではあるが結果的にステップアップできた形になった。会社では2カ月に1度の業績査定があり、段階が上がると準社員になれる制度がある。社員のスキルアップにも力を入れており、メイクスキルを上げる機会や資格制度の仕組みもある。しばらくはメイクの社内資格をめざして技術を磨いていきたい。

■シングルマザーになり将来設計を見直す

シフト勤務制なので、妊娠中も帰りが22時になる日もあったが、臨月に入るまで仕事をしていた。出産後、離婚してシングルマザーとなった。現在は、(単身赴任中の父親を除いて)実家でパート勤務の母親、弟と一緒に同居している。まだ学生の弟は、子どものお風呂係をしてくれる等、家族それぞれが役割を担って育児に積極的に協力してくれるのでとても助かっている。出産や子育てに関する情報収集は、経験から市役所が一番だと思う。シングルになった際も、市役所ではとても丁寧に教えてもらった。ママ友からの口コミ情報も役立った。今後は、働きながら子育てしていくために、豊中市のファミリー・サポート・サービスのような公的支援制度についても調べてどんどん活用していきたいと思っている。

育児休業中の今は、職場復帰に備えて、上司に近況報告をしながら職場の情報を得るようにしている。職場では同じように育休を利用する人も増え、保育所に空きがない場合は育休を延長できる制度もある。復帰後も希望すれば3年間は時短勤務ができるので、安心感がある。人間関係も良好で、女性の多い職場なのでお互いの気持ちをわかり合えるし、産休や育休の取得経験者である先輩からのアドバイスも心強い。転勤もあり得るが、勤務地に関しては子育て中の社員には配慮してもらえる。この先、今の職場でメイクのスキルアップをしていきたい気持ちは強い。自分が産休に入っている間にも新たな研修制度も創設されたようだ。

ただ、これから子どもを育てていくうえで、現在の収入では不安を感じる。たとえ準社員になれたとしても、その先の正社員への道がない。時短勤務ではさらに収入も減ってしまう。これまでは収入が少なくても好きな職場で働きたいと考えていたが、子どもが生まれてから考え方が変わった。シングルマザーとして経済的に自立して生活していきたいという思いから、将来を考えたとき、BAからいったん離れて、収入が安定している看護師をめざすことも選択肢のひとつかもしれないと考え始めている。

■地域社会の課題から夢を見つけた

この育休中に、小さな子どもを持つ母親の居場所が少ないことに気づいた。子連れではショッピングモールやレストランは過ごしにくい空間だ。特に若い母親同士が交流する機会がないことも気になる。最近は若いママたちも増えてきたが、行き場がなく引きこもっている母子も知っている。子連れの母親たちが集い、子どもを遊ばせながらゆっくり化粧品を選んだり、カフェや美容院も利用できるような居心地のよい「トータルビューティーサロン」を自分で経営する夢ができた。室内で安全に遊べて、大人も楽しめる情報交換できる空間があればいいと思う。これをビジネスチャンスと捉えて、そのために営業や起業についてもこれから少しずつ学んでいきたい。また、普段は美容業界の人との付き合いが多いけれど、できれば多様な業種の人とも交流したい。シングルマザー同士の情報交換もしたい。いろいろなネットワークを広げていくことが充実した人生につながると思う。

■働き続けたい女性へのメッセージ

私自身は負けん気の強さと向上心だけで頑張っていると思っている。育児と仕事を両立している女性を見ると、いつも「カッコイイ〜」と感じる。私は、子どもが生まれシングルになって、たくましくなった。自信もできた。常に「何でもできるんじゃないか!」という気持ちでいる。諦めてしまったらそれで終わり。夢やプランを持ちながら、元気に歩いていきましょう!

(インタビュー 2012.10)

白川真由美さん

1976年生まれ。夫、子ども1人(4歳)。箕面市在住。

勤務先：インターネット通販業(豊中市)、従業員数12人

雇用形態：正社員(週4日勤務) 育児休業：満1歳まで取得



■すべての仕事が点から線へとつながっていく

芸術大学の彫刻科を卒業。何か物を創って暮らしたいと思い、彫刻と似た立体的な花の世界をめざし、花屋でアルバイトしながら花の学校に3年間通った。その後、現在の会社に正社員で入社、在職中にフランスへ短期留学してディプロマ(フランスでは花屋をやるのに国家資格が必要)を取得した。しかし、しばらくして会社を退職した。海外に小学校を建てる活動をしている団体のNPO化に関わるためだった。ホームページを独学で制作し、ボランティア募集や民芸品販売にチャレンジした。結果的には、このときの経験が後に手掛けることになるネット通販の仕事に大いに役立つことになった。生活費を補てんするため、テレビ通販の受注コールセンターのアルバイトをするダブルワークの日々を経験した。そこでは、クレーム対応や通販の仕組みを学び、迅速さ・丁寧さ・質の高さを常に意識して業務を行った。なんと、アルバイトにして指導係にも抜擢された。

立ち上げが落ち着いたのを機にNPOを退職したが、そんな折、元の会社の社長より、ホームページが作れるのであればと誘われ、正社員として元の会社に再就職した。NPOでの経験を活かしてインターネット通販の立ち上げに携わり、当初は月5万円しかなかった売上を月1,000万円にまで伸ばすことができた。

あちこちと寄り道こそしたが、その時その時を一生懸命やっていると、すべての仕事が点から線へとつながっていくのだとその時に実感した。現在は、ホームページの企画・運営、後輩の教育・指導等をこなしている。

■仕事への信念が確立した瞬間

商工会議所の勉強会、ネットショップ通信講座等いろいろな勉強し経験することで、自分の引き出しがどんどん増えていった。そして、その引き出しを知らず知らずに開けて使っていた。できる限りのことをやっていたら結果が後からついてきた。ある時、在庫過多になっているアイテムを売りたいと思って社長に進言したが、「クレームになったら困る」という理由でいったんは反対された。しかし、ここはやってみようと思い直し自分の判断で販売したところ、結果的にすごく売れて今では主力商品となった。これが転換点となった。会社にとってプラスになると真剣に考えた結論なら、たとえ反対されてもまずは周囲を説得し、実行するべきと考えるようになった。

■育児休業からの復帰、夫への挑戦

妊娠がわかってからは、仕事をひとつひとつ同僚に渡していったので、混乱はなかった。育児休業中は、社会との接点がなくなり取り残された気持ちにもなった。外出できないストレスも溜まり、このままではいけないと感じていた時、また社長から「週に1~2回子どもを連れて来ていいから、先輩にアドバイスしてあげて」と声をかけてもらった。小さな会社の特権だと思うが、乳児用ベッドを抱えて職場に通った。そんな日々が気分転換になったし、仕事を忘れないということにつながっていった。

子どもが1歳になった時に職場復帰した。しかし、家事育児をしながらの週5日フルタイムは想像以上にたいへんで限界だった。精神的な余裕が全くなくなってしまった。しばらくして社長に直談判し、制度もない職場だったが正社員待遇のまま週4日勤務に変更してもらった。

夫に対しては協力を強く訴えた。「洗濯か掃除か料理か後片付け、どれかをやってほしい」と要求したら、「できそうな洗濯と後片付けにする」と。多少の不備には目をつぶって、任せたことはとりあえず「ありがとう」と感謝を伝え続けた。夫もそれが自分の役割という意識を持つようになった。いまでは洗濯物もシワを伸ばしてから干すようになったから驚きである。子どもが熱を出して保育園に預けられない時は、近くに住む母親にも手助けしてもらった。また、職場では、同じように働く母親が何人もいるので、互いにフォローし合う関係で、みんなで働きやすい環境にしようと話し合っている。

たぶん、子どもが大きくなるにつれ子育てに費やす時間は確実に少なくなるだろう。また独身の頃のように自分が働きたいように、やりたいことができるようになっていくのではないかとワクワクする。将来は独立して、自然の豊かなところに住みたい。インターネット通販なら全国どこでもやれる。今やっている仕事はその準備となっているのかもしれない。

■働き続けたい女性へのメッセージ

子どもを産み育てるということは人の助けが必要で、一人で全部背負込むと潰れてしまう。公的機関も頼って、自分の時間をしっかり持ってほしい。いったん離職してしまうと、よほどの資格や経験がないと同じ待遇で戻るのは難しい。経済的自立と子育てとの両立は大変なことだが、仕事を通して自分が成長していくのはすごく面白く、大事なことだと思う。自分の幸せのために、働き続けてほしい。

(インタビュー 2012.11)

金子真由美さん

1975年生まれ。子ども3人（13歳、8歳、4歳）、夫と同居。豊中市在住。
勤務先：製造業（従業員数約1000人）、吹田市内の事業所勤務（従業員約50人）
雇用形態：パート（事務職）
出産・育児による離職期間：1人目（1年9カ月）2人目（1年）3人目（1年3カ月）



■退職、復職を繰り返しながら3人の子育て

高校卒業後、現在勤めている製造業の会社に正社員の一般事務職として就職し、約6年間働いた。当時は「結婚して子どもができたなら会社は辞める」という雰囲気が当然のようにあって、育児休業を取っている人もいなかったもので、1999年、第1子出産を機に退職した。その後、子どもが1歳半になった頃、元の会社から「ちょうど事務員を募集している。パートとしてどうか」と声がかかり、2001年1月に復職した。当初は保育所が決まっていなかったので、月～木曜日まで母に子どもの面倒をみてもらい、その日程に合わせて働いていた。

2人目の出産は、パート休職というかたちで給料は出なかったが、会社に籍は置いていた。しかし、その産休中に突然、経営上の事情があったとはいえ、一方的に雇用契約を切られてしまった。悔しいし腹も立った。その1年後、保育所に入れたので、カード関連の会社でパートとして再就職した。

3人目を出産した時は、約1年3カ月子育てに専念した後、医療・レセプト点検の会社などで働いた。そして約2年後、なんと、また元の会社から、求人があるのでパートとして戻ってくれないかと打診があった。「二度と戻るものか」と思っていたのだが、経験を活かせる職場であるし、「そこまで言うなら戻ってやるか」という気持ちにもなり、また働くことになり現在に至る。

出産に関する情報は、当時まだネットが充実してなかったので本や口コミで集めた。豊中市の妊婦教室も利用し、そこで知り合った人と情報交換もした。出産後約1年で復職したのは家計を助けるためもあったが、1人目は子育てのストレスから解放されたいという思いが強くあった。子どもと二人きりになる月曜日が来るのがとても怖かった。だがそのストレスも、2人目、3人目と徐々にコントロールできるようになっていった。専業主婦として家の中に閉じこもるよりは、両立がたいへんであっても、社会に関わっていて本当によかったと思っている。

■自分なりに工夫しながらパートの仕事を続けていく

今は9時半から16時まで週4日働いている。子どもが3人だと毎日たいへんで、自ら扶養範囲内での就労という選択をした。保育所には今1人通っていて、第一希望の家から一番近いところに入れたが、送り迎えの時間を入れると通勤は1時間程度かかる。

会社の従業員は、正社員・派遣・パートで構成されている。その中では「自分の仕事」というよりも指示されたことをやっているのが現状である。しかし、営業事務という営業職の補佐的業務を担当しているので、営業職が少しでも動きやすいよう自分なりに工夫しながらサポートしている。特に、電話が鳴るとすぐ受話器を取るようにしているし、社名プラス自分の名前を必ず伝え、相手が切るまで電話は切らないというポリシーがある。「営業は電話があってなんぼのもの、電話から仕事が始まる」と思っているから、この電話対応を一番大切にしている。

最近、ファミリーサポート制度を利用しながら正社員としてバリバリと働いている友人を見ると、イキイキとしたその輝きを羨ましく思う時がある。今の職場には、パートからフルタイム勤務になった人もいるので、子どもが大きくなって自分に余裕ができれば、フルタイム勤務や正社員への道も考えていきたい。そして、一所懸命やればパートでも正當に評価される仕組みがあれば尚よいと思う。

■イクメンの夫と近所で暮らす母からのサポート

夫は同じ会社に勤務しているので、仕事についてアドバイスをしてくれる。家事や育児も主体的にやってくれるし、夫もそれが当然だと思っている。特別な事情がなければ19時頃には帰宅し、ご飯をつくる、子どもをお風呂に入れる、寝かしつけるなど、平日でも洗濯以外は何でもやる。夫は共働き家庭で育ったので、私が働くことや家事育児への協力は当然のように考えているようだ。先日、ブログで夫のイクメンぶりについて書き込んだところ「その影響でうちのパパもご飯をつくってくれるようになりました！」と返事があり、とても嬉しかった。近くに住んでいる私の母も働いているので、いろいろと助けてくれる。子どもが熱を出して保育所に迎えに行く必要があるときは母に頼むこともある。子どもの発熱で突然呼び出しがかかると、やはり同僚に申し訳ないと思うので、その存在はありがたい。母からの「誰もが通る道だから、大変だけどがんばりや」という手紙が支えでもある。家族の存在は心強い。

■働き続けたい女性へのメッセージ

事務職パートの募集は少ないが、求人広告には「パソコンのできる方」という条件が多いので、パソコンスキルは必須だ。私自身はパソコンのスキルアップに自己啓発として取り組んでいる。また、インターネットを活用してネットワークを広げることもやっており、フェイスブックでは昔の同級生と再会するなど仕事や家庭以外での世界も大事にしている。女性の人生は、子育てや家事だけではなく、広い視野で社会とかかわりながら生きられたら素晴らしいと思っている。そして、仕事・育児・家事すべてにおいて決して完璧でなくてよい。「掃除は毎日できない、まあいいか…」でOKだと思う。完璧主義ではつぶれてしまう。家族と話し合い助け合っていくことこそ大切だと思う。（インタビュー2012.11）

いわさき ひとみさん

1973 年生まれ。夫と子ども 1 人（2 歳）。大阪市在住。

株式会社ヴェルジュム 代表取締役

主に豊中市内の公共施設（すてっぷ、公民館等）でのパソコン講座を受託。

産休・育休：7 カ月



■短期の仕事を重ねながらキャリアを積み上げてきた

四年生大学を卒業後、財団法人に勤務するが 2 年ほどで退職。その後は、半年契約や派遣などの短期の仕事を色々こなした。大学の研究室等で事務をしていた時に、ホームページ作成やパソコン講座の手伝いなどを並行して行っていた。大学での事務が任期満了になった後、それまでグループ活動として請け負っていたパソコン業務を本格的に行うことに決めた。この決断には、いろんな人が悩んでいる自分の背中を押してくれたことが大きかった。まず独学で会社づくりを学びながら、専門家の助けも得て 2006 年に法人化した。今は、代表取締役の自分 1 人が役員兼社員というかたちだが、他の 5 人のスタッフはそれぞれ本業を抱えているので、仕事単位で都度請け負ってもらっている状況である。その後、2009 年に結婚したが、苗字が変わると結婚後の名前に法人登記を変更しないといけないというのが驚きでもあり手間もかかったが、なによりも、仕事に対する責任感と取引先との信頼関係が築きやすいということで、法人格を取得したことは本当によかったと思っている。

■周りの理解に助けられて子育て中

2010 年に長女を出産。産休・育休という制度はなかったものの、産前 1 ヶ月と産後半年ぐらいは実質的に産休状態であった。仕事面ではメンバーの頑張りや気遣い、取引先の理解に支えられた。「やっつくからいいよ」という声掛けもたくさんしてもらったし、まだ赤ちゃんで保育園に預けられないときに、だっこして打合せに参加したこともある。夫はイクメンとまでは言えないが協力的で、具体的なお願いをすればやってくれるので助かっている。ただ、まだ何をしたらよいかわからないようで、そのあたりが今後の課題でもある。実家にも世話になっているが、親も高齢なので、時々見てもらうぐらいの適度な距離感が大切だと思っている。

出産前後の情報は主にインターネットで集めた。いわゆる会社勤めではないので利用したのは出産一時金ぐらいであったが、一番助かったのは、出産後に“産後うつ”のような状態になった時、思いがけず産院から電話が入ったこと、また、保健所からの保育士訪問であった。子どもと二人きりで向き合っていると意味もなく涙がこぼれてきたこともあったが、話を聴いてもらうなかで救われた。出産後、家にこもりがちになる母親を孤立させない仕組みとして心強い制度だと実感している。

娘は 1 歳半から一時保育に、2 歳から保育園に預けている。実家の都合が悪い時の安心材料としてファミリーサポート制度にも登録している。また、仕事の打ち合わせなども「この時間まで」と事前に関係者に伝えておくことで予定通り帰れるよう工夫している。急な発熱時に預かってくれる病児保育をしてくれる施設がもっと増えればよいと思うし、いま預けているのは私立保育園だからかもしれないが、お盆休みなどがあって預かってもらえない期間があるので不便さもある。夜のパソコン講座への対応としてベビーシッターを探したこともあった。これからは、多様な働き方をする女性たちが増えたこの時代に合わせた利用しやすい保育システムが広がればよいと思う。

■お互いがフォローし合える職場環境に

今は保育園だからよいが、学童保育は校区によってあったりなかったり、保育時間もまちまちだと聞いている。小学校からが大変になるんじゃないかと少し不安を感じている。また、今のメンバーからも親族の病院付添いなど、どうしても女性が負担せざるをえない状況にいる話を聞いているので、常に仕事で無理をしないようにとの声かけを心がけている。メンバーとは互いがフォローし合えるよう密に連絡を取り合い、柔軟性をもって会社を運営している。今後は、社員をむかえる可能性もあるので、経営者として、女性が子育てしながらも働きやすい職場環境や制度をしっかりと整えていきたいと考えている。

■働き続けたい女性へのメッセージ

起業や独立も、女性の働き方の選択肢のひとつとしてぜひ考えてもらいたい。自分は「仕事も子育ても、できる範囲でバランスよくできたらいいな」という気持ちだった。入社して何時から何時まで仕事という縛りがなく、時間に融通が利く今の仕事だからこそ両立ができたと思っている。

また、復帰するためには保育園の問題があり、どうしても思い詰めてしまいがちだが、そんな時はできる限りの周囲の助けを借りて、気持ちを少しでもラクにできれば前進できるんじゃないかと。育児休業の延長や保育園の待機児童の問題が改善されることで、もっと働き方の選択肢が広がればよい。

春野夜明さん（仮名）

1964年生まれ。子ども1人（5歳）、夫と同居。豊中市在住。

勤務先：製造業（従業員数約100人）、大阪支店に勤務（吹田市）

雇用形態：正社員（営業職）

育児休業：1年3カ月取得



■ 転職2回の経験でパワーアップ

大学卒業後、大手流通業の会社に就職し、異動も経験しながら営業事務職に5年間従事した。しかし、昇進・昇格に関して上司の正当な評価を受けていないと感じた出来事があったため、思い切って転職を決意する。二つ目の職場は就労支援関連の公益法人だったが、内情は、とても過酷な労働条件で職員やクライアントを人間扱いしていない状況に愕然とし、1年で見切りを付け退職した。その後、現在の会社である化学系の製造をしている会社に事務職として転職し、吹田市内の事業所で勤務することになった。約10年の事務職従事となるのだが、同時に、専門知識はなかったものの検査や分析という理系分野の業務も担った。先の2回の転職においては、いずれも理不尽だと思う事象が退職の引き金になったし、企業や組織の嫌な部分もたくさん見てしまったが、そのことで自分自身がパワーアップされ一回り大きくなった気もした。しかし、本当の試練はここからであった…。

■ 「育休切り」と「パワハラ」に立ち向かう

いまの職場で10年目のときに妊娠がわかった。当時は、ちょうど育児・介護休業法の改正直後だったため、出産や産休・育休に関する情報収集は新聞等で簡単に得られたし、TVなどのメディアでも情報量が多く助けになった。

職場には「産休・育休の後には職場復帰します」と早い時期から宣言していた。しかし、そのうちに社内の怪しい動きを察知した。代替要員として、臨時や派遣ではなく正社員採用を会社が画策していたことがわかった。3人という少ない人員の事業所に正社員を迎える余裕などないことは分かっていたし、その点を問い詰めても明確な返答はなかった。産休に入った後も育休切りが不安で心配で、気持ちは出産どころではなかった。そして育休中に「復帰するなら東京本社に復帰してもらおう」という一方的な電話が突然に会社から入った。怒りでいっぱいだった。そこで、東京の人事部に信頼できる人物がいたので相談したところ、こっそりと然るべき対処を勧められた。その後は、ただただ不当な扱いに対する闘志が湧いてきて、自分で情報収集し雇用均等室に行くことを決心した。均等室では丁寧に訴えを聴いてくれ、会社に対し厳しい行政指導がなされた。世間には泣き寝入りする事例が多い中、我ながらよくここまで闘ったと自分で自分を褒めてあげたいと思う。

しかし、“歓迎されない復帰”を果たしてからは仕事の無い閑職に追いやられた。また、全社員のうち自分だけ定期昇給がなかったり、同僚や上司からの嫌がらせというパワハラともいえる状態が約3年間も継続し、精神的にも相当に追い詰められていった。ふたたび均等室にも訴えたが、この時には思うような結果は出なかった。しかし、これに屈して辞めるという選択をしなかったのは、負けん気と経済的に自立して働きたいという強い気持ちがあったからだ。また、この環境を逆手にとって、仕事が与えられないという「無」の時間を自分のプラスに転換するため、勤務時間中は自己啓発に没頭した。

■ 事務職から女性初の営業職へ

転職は、事務から営業へと職種替えになった時だ。この頃、新社長が就任したことが社内の雰囲気を変化させ、女性初の営業職への抜擢にもつながった。東京には女性初の部長職が誕生し、彼女が自分にとっての良き相談相手でもあり、ロールモデルやメンター的な存在にもなっている。また、公正な人事考課制度の導入も進みつつあるなど少しずつ組織が変わり始めている。営業の業務に関しては、自由な裁量もある程度は与えられているので、伸び伸びと仕事ができる環境であるし、やりがいもある。ただ、女性が営業職として活躍することに対し、まだまだ否定的な考え方の人も周囲に多く、それなりの苦労もあるのだが、応援してくれる人や頑張りを見ていてくれる人ができたことはとても心強く、自信を持って仕事に取り組めるようになった。

子どもは幼稚園児になったが、土・日は趣味を活かした副業の関係で自分が外出することもあるので、夫は積極的に家事や育児に関わってくれる。仕事も子育ても副業も、すべてにおいて充実し、バランスのとれた生活を楽しんでいる。

今後は、研修や社員教育制度、メンタルヘルス対策の取組みの必要性などを会社に提案していき、後輩のためにも、働きやすい環境の実現に寄与したい。

■働き続けたい女性へのメッセージ

仕事と生活のバランスを考えて無理なくやってほしいと思う。有給休暇が取りにくいという話もよく聞くが、それは勝手にそう思い込んでいるだけのケースもあるようだ。やはり、メリハリのある働き方、他人の顔色をうかがわなくて済む気持ちの良い職場環境が理想だと思う。人は、ともすると平均でありたいとか、人にどう評価されているのかが気になって自身の行動を自己規制してしまうなど、周囲や環境に影響されがちである。

この自分の貴重な体験談が皆さんのチカラになれば嬉しい。ぜひ、自分らしさを失わないような選択のうえに働き続ける道を歩んで行ってほしいと思う。

(インタビュー 2012. 11)

H. Kさん

1978 年生まれ。夫、子ども 1 人（3 歳）。豊中市本町在住。

勤務先：大手 IT 企業（大阪支社に勤務）

雇用形態：正社員

産休および育休期間：子どもが 1 歳 1 カ月まで



■早い段階からの将来設計と着実な歩みでキャリアを築く

中学時代からパソコンには触れる機会が多かったせいか苦手意識もなく、進むべき道として自ずと高専を選択した。卒業後は教師の勧めもあって、四年制大学の情報系工学部 3 年への編入を果たし、より専門的なプログラミングを学んだ。卒業研究では学習の過程をまとめて発表するというカリキュラムがあり、プレゼンテーションの技術も自然と身に付いていた。これが、後のシステムエンジニアとしての仕事にとっても活かされることにもなった。

今の会社に入社したのが 2001 年、2005 年に結婚、2009 年に出産した。育児休業は延長することもできたが、保育所が決まっていたので、子どもが 1 歳 1 カ月の時点で職場復帰した。当時、夫は、出産を機に退職をしてほしいと考えていた気配もあった。しかし、新入社員だった頃の上司が、子ども 2 人を育てている女性の上司で、「おお、すごいな～」といつも眩しく感じていたから、迷うことなく自分もその後が続いた。今思えば、そういう先輩のモデルケースが、働き続ける選択をする要因にもつながっていた。

■任されたプロジェクトの始動時期に妊娠がわかる

自分自身が初めて稼働までを取り仕切る 8 カ月のプロジェクトを担当することになった際、それと前後するように妊娠が分かった。でも、迷うことなく臨月近くまで普段通りの勤務をこなした。その後、産休に入ってしまったので本稼働に立ち会えなかったのが心残りではあったけれど、その直前までは大きなお腹で頑張った。体調も良く、同僚も取引先も温かくサポートしてくれたので、無理なく継続することができた。

産休中、「本稼働しました！」という会社からの連絡が本当に嬉しくて、達成感でいっぱいになった状態で出産を迎えることができた。だから、早く復帰して、また仕事を頑張ろうという気持ちにもなっていた。代替要員こそ配置されなかったが、同僚が業務を引き継いでくれたので、自分が産休に入っても業務が全然回らなくなるという状況ではなかったし、職場の雰囲気も、産休・育休から復帰するのを大歓迎という対応であったことがとても心強かった。

■両立には夫の協力や社会とのつながりが必要

育休中は、同年代の子どものいる女性との“愚痴大会”で随分と気持ちがラクになった。また、豊中市主催の行事にも積極的に参加したことで、同じ環境や境遇の人たちとの交流ができ、大いに育児の助けになった。

保育所は通常 18 時半まで、最長は 19 時まで預かってくれる。実家が遠く頼れる人が近くにいない。たまには 20 時頃まで残業になることもあるので、そこは夫と調整してなんとか乗り切っている。社内保育所は関西にはないが、通勤ラッシュの電車に同乗させることは考えられないので、保育所は自宅近くが望ましいと思っている。朝は毎日、「保育所、行きたくない」とか、「この服は嫌」とかぐずるから心も揺れるが、自分自身は社会の一員であるという意識の中でずっと働き続けていきたい。仮に専業主婦で子どもと 2 人きりだと思えば、やっぱりちょっと気が滅入ってしまう気がする。「誰々ちゃんのお母さん」「誰々くんの奥さん」とかではなく、一人の人間っていう、自分だけの世界が必要だと思っている。趣味の延長線で、スクラップブック講師の認定資格を取得するなど、着実に活動の幅も広げている。

いまのところ、ファミリーサポート制度はまだ利用に踏み切れていない。今後利用するかもしれない学童保育の時間帯には漠然とした不安もある。だが、小学生までは短時間勤務が可能だから、この先もなんとか両立はできると思っている。ただ、二人目、三人目と子育てしながら働き続けることが自分にできるのかどうか、この点はこれからの検討課題だと考えている。

■ダイバーシティを推進する働きやすい職場環境

職場には、女性が出産後も働き続けることについて「当然のこと」という雰囲気がある。上司も「うちの会社って、子育てしながらでも働きやすい？」と聞いてくるし、「子育てしながら働くための、そういう何かいいモデルになってくれたらいいね」とも言われている。最近、職場の後輩で結婚した女性が数人いる。もしかしたら自分自身がロールモデル的な存在と映っているのかもしれないと感じる時もある。

る。将来的には、子育てを活かした視点で新ビジネスを企画できればよいと考えているし、今の会社で働き続けて、段階を踏んで昇進とか昇格とか、それなりの責任ある立場に立つことも少しずつ思い描き始めている。

会社では、全女性社員に「女性便利帳」という冊子が配布される。例えば、出産にあたって自分がこんな制度を使えるとか、女性特有の病気のことなどあらゆる情報が掲載されている。育休中も、申請すれば会社のメールを携帯から閲覧できる仕組みもあり、安心して復帰に向けて過ごすことができた。

ただ、女性が働き続けるためのサポート体制は充実しているが、男性の育休はゼロに近い状況である。このあたりが社内的には今後の課題なのかもしれない。

■働き続けたい女性へのメッセージ

人生は挑戦。仕事でも生活面でも「絶対できない」という限界を意識しない方がよいと思う。頭の中でいろいろ考えるより、取りあえずやってみる。やってみたら意外とできることも多いものだ。まず一歩を踏み出してみることが肝心だ。また、自分が働いているからこそ、夫や子どもと常に対等な関係で自立的に接することができるし、普段離れていることで逆に密なコミュニケーションがとれ、関係性を良好に保つ秘訣になっていると思う。

(インタビュー 2012.12)

藤原美幸さん

1970 年生まれ。子ども 2 人（中学 1 年生、小学 2 年生）。豊中市在住。
勤務先：株式会社ソラスト（旧：株式会社日本医療事務センター）
京都支社 支社長
雇用形態：正社員（総合職）
産休および育休期間：第一子・第二子ともに産前産後プラス半年間



■経理担当から積み上げた勤続 24 年「前向きに生きたい」

高校卒業後、経理のプロをめざして卸会社に就職するも、思っていた業務内容と違っていたし、何よりも女性が長く働けない環境や雰囲気があったため、現在の会社に経理部門を志願して転職した。その後、教育事業部門などを経て、現在は 260 人の社員を統括する支社長という責任ある立場となった。女性が 9 割を占める会社であるからこそ自分も頑張るぞという想いから、今日まで働き続けることができたのだと思う。

主任昇格後に第一子を出産、課長代理の時に第二子を出産した。過去には、育児との両立に理解を得られないことなどで悩んだ時期もあった。しかし、当時の会長(故人)に「役職者が出産し、仕事を続ける女性として次のあなたを創っていきなさい。」と言葉をかけられたことを機に、これまでの肩の力が抜け、社内で出産後も働き続ける先駆者として、ここまで実績を積み上げてきた。学生時代から自立心が強く、女性の働き続ける意味や価値をしっかりと認識していたし、めざす方向を明確に思い描いていた。今振り返ると、目標に向かって一歩ずつ前進してきたことで、思いを実現することができたのだと思う。会社の中では仕事を選ぶことはできない。「会社内での立場は自らが行動し勝ち取るものだ」と思ってやってきた。

■周囲を巻き込んで働きやすい環境をつくり上げる

今一番感じていることは、同僚や部下に恵まれていたということ。育児との両立のため、「妊娠中は出張できない、残業はできない、転居転勤もできない」など職場では数々の主張をしつつも、一方で、その実現のために工夫もしてきた。仕事と生活のバランスを取りながら自分らしい人生を積み上げてきたという思いもある。時間内に効率よく働くためにはどうしたらよいか、周囲にどう協力してもらえるかを常に考え、提案し、素早く行動に移してきた。ある意味わがままに自分の生き方・働き方を貫いてきたが、周囲の方たちが温かく受け入れてくれたことに今はとても感謝している。今まで困難を乗り越えてこられたのは、社内で培ってきたネットワークや人間関係が一番大きかった。まさに、仕事力とは人間力だと実感している。

■働き続けるための「地域との関わり」「子どもの自立教育」

保育所の先生に「地域と関わりなさい」と助言していただいたことが印象に残っている。また、子どもの夜泣きがとてもひどく困っていた時、保健師の訪問制度にも助けられ、育児ノイローゼ状態から救われたこともある。ひとりで悩まず、我慢せず、SOS の声を上げることで気持ちが本当にラクになった。保育所のママ仲間にも遠慮しないで「迷惑をかけてみよう」と子どもの送り迎えなどを頼んだこともある。働く母親同士の連帯はとても心強かったし、情報収集にも役立った。自分が行き詰まってしまいう前に、地域のコミュニティなどへ積極的に参加していくことも育児と仕事を両立する上で心の支えになる。

また、出産前後は、行政窓口をとことん利用した。出生届と同時に保育所申請をすればスムーズに行くこと、職場復帰が必要な人材であるという文書を会社に作ってもらい添付すると有利であるなど、いろいろな技も市役所窓口から仕入れてきた。使える制度は全部使ってやろう（笑）という意気込みで情報収集をすることはとても重要だと思う。

そう考えると豊中市は、子育て支援の制度や仕組みが整っているし、人権視点のある教育も盛んで、住みやすい町であると思う。しかし、あえて施策に提言したい。働く母親としては、中学校の給食制度をぜひとも導入していただきたい。また、学童保育に関しては利用しにくいと感じている。実施時間延長や対象年齢の拡大は嬉しいのだが、実際には 19 時までの延長利用をしている人は意外と少ない。一方で母親同士では、夏休みなどの長期休暇期間だけ利用可能になるなど、制度の拡充を期待している。しかし、今はまだ制度が未整備な状況のため、近所の家を拠点とした“自力の第二次学童保育”を実践している。今後も、働く女性の声として改善や要望を行政にどんどん出していきたい。

現在は、母親の介護をしながら育児もこなす忙しい日々を送っている。そのため家事は土日に集中して行っている。

夫とは離婚しているのですが、子どもの教育には自立を促すことに重点を置いている。家族である以上は、子どもにも生活者としての役割を担ってもらう必要があるからだ。それが女性の就労継続のための条件のひとつであるとも言える。

■女性が働くとし生産性が上がる

社内にはユニークな取り組み事例がある。残業の多かった部署において、子育て中の女性社員を多く配置したところ、なんと残業が激減し生産性も上がった。女性が働くとし効率が良いというのは本当だった。男性社会における効率とは質の違う、段取り力の真骨頂ともいべき爽快な成果であったと思う。

いま社内では、女性が働きやすい職場環境づくり、多くの女性管理職の輩出という方向へ動き始めている。出産年齢が高くなってきた今、たとえ社内に制度があったとしても、一定の職責に就いた女性が、気兼ねなく利用できるかといえば、厳しい状況だと言わざるを得ない。これからは男性社員にも積極的に育児参画をしてほしいし、男性の部下に子どもができれば、積極的に育児休暇を取ってもらいたい。女性社員だけではなく男性社員にも理解のある風土や環境づくりが喫緊の課題である。自分には率先してこの課題に取り組む使命があるようにさえ感じているし、できる限り関わっていこうと思っている。例えば、体験を語る講演、ダイバーシティ専門部署の創設など、子どもがいる女性社員の好事例を示す機会も必要であると会社に働きかけていきたいと思っている。

社内には子育てしながら支社長としての職務で働く自分のことを知らない女性社員も多い。これからは出産や育児をしながら女性が安心して就労継続できるよう環境を整備していくためのサポートを続けていきたい。

■働き続けたい女性へのメッセージ

経験から言えるのは、まずは自分が会社にとって必要な人材になるということだ。権利を主張するには、裏打ちされた努力や実績が必要となるからだ。

そして、使える制度は全て利用し、周囲も巻き込んで、働き続けるための工夫をしていく覚悟がいる。働く母親は子どもに対して、ある種の罪悪感・後ろめたさを日々感じている人が多いかもしれないが、子どもたちが巣立った後の人生は長い。また、出産・育児を理由に能力があっても自制してしまう女性、責任ある立場になることをためらう女性が意外と多い。しかし、最初から諦めてしまうのではなく、できることからやってみる、頼れる人には甘えてみる、という一面も大事だと思う。自分を磨きつつ勇気を持って行動を起こすことで、自ずと道が拓けていく。

女性の人生には、立ち止まらざるを得ない局面が多いが、自分が動くとし必ず周りも動いてくれる。ぜひ「自分らしく生きていく」ことの大切さに気づいてほしい。

最後に、女性が働き続けやすい仕事の一つに医療事務があるのでお勧めしたい。ライフステージにより勤務形態を選べることも魅力の一つだ。

(インタビュー 2013.2)

1. Mさん

1980年生まれ。夫、子ども2人（6歳・3歳）。豊中市在住（千里中央）

勤務先：大手通信業（大阪市内の支店）

雇用形態：正社員（営業職・主任）

育児休業取得期間：第一子は1年間、第二子は2年間。



■営業職一筋で12年目

入社以来、一貫して営業職。外回りと内勤の半々での忙しくも充実した日常を送っている。4年目に同僚と結婚、6年目に第一子を出産と比較的早かったため、関西圏内での支店間転勤の経験は何度もあるものの、まだ転居を伴う転勤は経験していない。しかし、子どもの小さい現在は会社も考慮してくれるようだが、総合職なので将来的には自分自身が単身赴任を命じられることもあり得るのではないかと考えている。

現在、時短勤務を利用中で16時まで。通勤には1時間要するので帰宅は早くて17時。それから保育所へ迎えに行くのが日課となっている。妊娠前は毎日残業があったが、逆に今は残った仕事は自宅に持ち帰ってこなしている。近所には頼れる親族はいないから、子どもの病気の際は自分が休むことになる。

■時短勤務利用者の多い職場が働きやすさにつながっている

社内には妊娠したら辞める風土が昔はあった。しかし、会社の合併を機に、時短勤務や時差出勤の制度ができ、とても女性が働きやすくなった。もともと出産での退職が多かった職場だったが、いまは、ほとんどの女性が育児休業のあと復帰してくる。

支店の従業員数は約30人で、うち女性は3割程度。そして現在、時短勤務利用の女性が全7人いて、そのうち同じ部署には4人もいる。これがとても心強い。誰かが育児休業に入ったら、他の誰かが復帰してくるというような好循環が自然と生まれていて、代替要員が投入されることはほとんどない。工夫して効率よく取り組めばなんとかなるものだ。

■子育てと仕事、揺れ動く気持ち

女性の役職者は課長までが多く、部長職となると全社的にも少ない。昇進や昇格は試験と評価で決まる。女性の中には責任のある管理職という立場を望まない人もいる。長時間労働につながることもあるので躊躇するのが一般的だ。

自分自身も、小学校の入学説明会等に参加した際、他の母親の話を聞くにつけ、両立できるかどうかの不安が増す。学校行事は平日にある、習いごとの送り迎えは厳しいかも、と考えてしまう。保育所時代は比較的両立しやすいが、学童保育となる小学校に入ってからが大変だと。学童は4年生まで、そんな中でも自分はずっと働いていてよいのか？ という気持ちが芽生えてくる。一方で、いったん辞めると正社員には戻りにくい… そんなことを毎日考え、いま葛藤の中にいる。機会があれば、もっと子どもの年齢が上の人の経験談を聞いてみたい。

時短勤務は1年生までなので、そこから先の制度が会社に欲しい。できることなら小学6年生までは時短勤務を利用したい。そうすれば定年まで働き続けたい人にとっては大きな助けになるだろう。皆で会社に提案もしていきたいと考えている。

■職場での男女平等感が高いが、日常の言動に傷つけられることもある

子育て中の女性に対する見方に関しては、制度や仕組み、表向きの理解はあるものの、実は、男女問わず同僚からは「早く帰れて、いいよな～」という視線や言葉があるのも事実だ。時短勤務者は内勤職に優先的に転向できることから、すでに内勤枠が時短勤務者で埋まってしまっていて、ほかの人が内勤職への転換ができにくいという現実がある。

自分自身は営業職に魅力を感じていて、あえて内勤を希望していない。もっと営業の面白さを他の女性たちにも解ってもらえたら嬉しい。確かに目標達成には努力が必要だが、時短勤務の自分でも営業成績が上位になる月が結構ある。やり方次第、工夫次第でやりがいと達成感を味わえる。営業に必要なコミュニケーション能力は子育て経験と通じるものだと思う。

■地域で、ネット上での情報収集が役立つ

ファミリーサポートはよく利用する。もちろん預かってもらうのだが、産休中に自分で預か

ることもしていたし、現在は時短勤務なので、たまに預かることもある。今思えば、このネットワークが情報収集源として機能した。特に同じマンションの人同士でペアになると安心感もあるし、新たな友達もできる。

また育児休業中は、上司から3カ月に1回連絡が来るというシステムもあった。さらに、復帰までの支援プログラムとして、いろいろな情報が会社から送られてきた。ネット上のコミュニティもあったので、特に一人目の時は情報交換に使えたことがとても助かった。

地域の子育て支援センターのイベントにもよく参加した。ただ、育児休業中のママだけを対象とした催しをもっとあれば、同じ境遇で共感し合える機会になったかと思う。保育所に預けて復帰予定のママたちと知り合うチャンスが少なかったのが残念だった。出産後の方向性が違っていると、どうしても分断される気持ちになったからだ。

今後だが、今の会社でずっと働くかといえば、それはわからない。実は他にやりたいことがあって、趣味や資格を活かした独立志向が高まってきている。その実現に向かって、いまは必要なスキルを磨きつつ、仕事や地域での人脈と経済基盤を固めていく時期だと思っている。

■働き続けたい女性へのメッセージ

なんとかなるから働くことを続ける選択をしてほしい。職場もすべては人間関係からだと思うので、表現の仕方は大切だが、できるだけ声をあげればなんとかなるものだと実感している。

二人目出産後からは、夫も家事や子育てに積極的に協力してくれるようになった。主体的にはいかないが、自然と協力せざるを得なかったというのが正しいかもしれない。

女性が出産後も働き続けることはまだまだ当たり前の時代にはなっていないが、きっと続けていて良かったなと思える時が来る。効率よく工夫していくことも大切。たとえ前例がない会社であったとしても、家族の理解が得られない状況であったとしても、自分自身で切り拓いていくことができるものだから。

(インタビュー 2013.2)